

## 天声人語

「その日は、秋晴れのよい天気でした。ゆっくり流れて行く白い雲に、別れ別れに、なってしまった母や父や妹のことを、たずねてみました。雲は、だまっていた」。

伊勢湾台風で家族を失った小学5年生久野みき子さんの作文である▼60年前の9月26日、東海地方を直撃した台風は、5千人を超す死者・行方不明者を出す。港に近い名古屋市立白水小学校では142人もの児童が犠牲になった。生き延びた子どもたちによる作文集が、21日から名古屋市博物館で公開される▼「暗いどろ海の中を、早い流れにのって、流されました」と書くのは6年生相根美弥子さん。<sup>あいね みやこ</sup>「お母さんが、『お父ちゃん！みやこ！幸男！』と言ったかと思うと、私のかたにかかっていた、手はずれてしまいました」▼土曜日だった。夜、川の堤防が決壊し、貯木場から材木が街へ流れ込む。「たたみがぶくつとっていた。もう足首まで水があった」と5年生水野洋子さんはつづる。水位が上がり、逃げ出すいとまもない。

「天井に手がとどくようになったその時は、むねがしめつけられるおもいだ。お父さんは（天井板を）げんこつで『ガンガン』とたたく」▼市博物館の瀬川貴文学芸課長（42）は直筆の作文を整理しながら、多くの書き手と会ってきた。「当時を語り、涙を流す方もいました」▼屋根の上で何日も暮らしたこと、亡くなった級友の家を訪ねたこと――。原稿用紙は変色し、誤字や脱字もある。小学生がつむいだ言葉の壮絶さに打たれた。